

留学報告書

2017年1月26日

工学系研究科都市工学専攻修士1年

増田耕平

①留学準備

今回の留学では、東京大学の交換留学を利用しました。応募は東京大学を通して行われ、留学先の大学には、東京大学からの推薦が決まってから志願理由書などの書類を提出しました。選考は東京大学でのみ行われたものと理解しています。なお、留学中の奨学金も東京大学から支給されました。地域に応じて決まった月額が支給されるというもので、私の場合は月6万円を8月から12月までの5ヶ月間受け取りました。さらに、リーディング大学院のGLAFSからも往復の航空券代を支給していただくことになっています。

留学前の準備としては、文献研究及びスペイン語の学習が主なものでした。文献は、日本で（東京大学で）手に入る関係論文のほか、手法に関する本を読んでいます。スペイン語は、学部生3年生の時に休学して1年間メキシコで勉強

して身につけたものが大半で、それに加えて論文等で日頃から触れることで維持・向上させていました。

また、留学中の滞在先も渡航前に準備しました。留学先の大学には寮などはありませんので、Facebook でルームシェアを探しました。あちらでは学生はアパートや一軒家の寝室を一部屋借りて住むというのが一般的で、契約方法も口頭だけのインフォーマルなものです。

②留学先の概要

留学先は「エル・コレヒオ・デ・メヒコ」(el Colegio de México)という大学院大学でした。メキシコシティの南部に位置する小規模な人文系大学で、7つの「センター」(アジア・アフリカ学センター、人口・都市・環境学センター、経済学センター、歴史学センター、国際学センター、言語・文学センター、社会学センター)からなります。修士課程では、各センターで2年に一度20~30人を受け入れており、政府関係機関等で就労経験のある20代後半から30代前半の学生たちがメキシコ各地から集まります。留学生もおり、私の所属していた人口・都市・環境学センターではコロンビア人が1人いました。教授らの中にはウ

ルグアイ、アルゼンチン、コロンビアといったラテンアメリカ圏の外国人が多く在籍していました。男女比は肌感覚としては教授・学生共に半々くらいの印象でした。

メキシコ最高峰の大学院大学で、少数精鋭であるために学生のレベルが非常に高く、学生生活のサポートも充実していました。日々の授業では毎回合計 100 ページほどの論文を予習し、その内容について発表・議論しました。論文はおおよそ 7 割がスペイン語、3 割が英語でした。東京大学にいたときは参考文献等もほとんどが日本語でしたが、留学先ではスペイン語だけでもラテンアメリカ全域での知の集積を活用しており、また英語も相当数読むということで、積み重ねのレベルが違っていると感じました。学生サービスとしては、まず学食が 7 ペソ (40 円相当) で提供されます。スープ、メイン、米またはパスタ、トルティージャ、パン、サラダbuffet、デザート、飲み物が含まれる豪華なもので、路上の屋台で外食しても 25~50 ペソはかかることを考えるとメキシコであっても破格の安さです。コピーサービスもあり、1 ページ 0.4 ペソ (4 円相当) で印刷でき、図書館で借りた本のコピーを依頼することもできます。また、各学期に 500 ページ分のデポジットが支給されます。図書館では学習用のスペースはもちろん、集

まって勉強や発表の準備をするための小部屋を貸し出しており、活発に議論が繰り広げられています。学生数に対して十分すぎる数のパソコンも設置されており、パソコンを持参しない学生も多くいます。学生数と教授数との比が約3：1らしく、学生への指導が手厚いととも、教授の負担が小さく、研究に専念できるようです。実際、相当数の書籍が出版されており、滞在中にコンフェレンスが何度も開かれていました。

③留学期間中

今回の留学では修士論文に向けた研究を主目的として位置付けていましたが、正直なところそれを達成できたとは思っていません。理由は2つあると考えており、1つは授業が予想以上に忙しかったことです。受講していた授業は3時間のもの2つだけでしたが、前述のように予習の量が非常に多く、しっかりと予習をしていかないと授業についていけないため多くの時間を割くことになりました。メキシコでは「卒業」後に「学位」を取得するのが一般的で、学部なら4年、修士なら2年は授業だけに専念し、その後で研究を始めるという環境も影響しているかもしれません。コレヒオの先生やオフィスの人によると、多くの交換留

学生はそうやって時間がなくなってしまうようです。

2つ目の理由は、研究のバックグラウンドが深かったことです。私の研究対象はメキシコシティの路上商業で、郊外住宅地における役割を取り上げようとしているのですが、そのバックグラウンドとしてのインフォーマリティの研究が盛んに行われており無視することができないということで文献を漁っていました。すると日本では出てこなかったような研究が多く見つかり、バックグラウンドを整理し論を組み立てるだけでも大変なことがわかりました。現在もそれを終えたわけではなく、読み切れなかった文献をデータ化して持ち帰り、今後日本でまとめていく予定です。

以上の理由から、当初の目的であった実地調査などは行うことができなかったのですが、日本に滞在しているよりもバックグラウンドについての知識は得ることができたと感じています。メキシコの都市問題についてのトピックは授業で毎回のように扱い、インフォーマリティについては商業だけでなく、特に住居について多く学びました。自分の研究したい内容に近いインフォーマリティの内容については、指導教員のアドバイスを踏まえて文献を読んでいきました。学生数が少ないにも関わらず図書館は大きく、多くの文献に触れることができま

した。また、論文サイトへのアクセス権も多く与えられ、東京大学ではライセンスの問題でアクセスできなかった論文を読むことができ、それに伴ってさらに読みたい論文もネズミ算式に増えていきました。おそらく、予定通りに現地で調査だけを行っていればこのように世界中の既往研究に触れることはなく、国内の論文と少々の英語の論文を読むだけで世界的に全く意味のない研究になっていたのだろうと思うと、この留学もよかったように思います。まだ修士課程の一年目が終了するところなので、残りの1年間で修正し、入念な下準備と現地調査を伴った論文を執筆したいと思います。

メキシコでの滞在に慣れていることもあり、普段の生活は特段変わったこともなく過ぎて行きました。家で朝ごはんを食べた後にバスで2km弱離れた大学に行き、授業がなければ図書館で勉強し、昼ごはんは7ペソの学食で済ませ、勉強に戻り、夕食は時間がなければ屋台で外食、あれば調理するというのが毎日の生活でした。曜日によっては、学内のフットサルコートでフットサルやバレーボールをしたりしていました。美味しいコーヒーやビールは街中まで出ないと見つからないので、週末は街に出ることが多かったです。

余暇時間は多くを自分のプロジェクトに使いました。ベラクルス州の伝統音楽

ソンハローチョのドキュメンタリー映像を作るというプロジェクトを立ち上げており、メキシコシティやベラクルス州で撮影を行いました。また、現代的な都市ソンハローチョのコンサートは首都メキシコシティでも多く開かれるため、週末に見に行くことも楽しみの一つでした。また、プロジェクト中に知り合った音楽家兼楽器職人のもとで楽器製作を習ったりもしました。

④次年度参加する学生へのアドバイスなど

英語圏やヨーロッパならまだしも、メキシコに留学する人は少ないと思いますが、すでに東京大学はメキシコシティの2校（メキシコ国立自治大学およびエル・コレヒオ・デ・メヒコ）と交換留学の協定を結んでいるので、可能性もありませんかと思いますが、その際にまず必要となるのは語学力です。私と同時期に同大学に留学していた日本人は2人いましたが、1人は最初の半年を語学学校で（その後、大学院に戻れたかどうかはわかりません）、もう1人は授業を取ってはいったものの授業に全然ついていけないと言っていました。特に授業中は議論をすることになるので大変です。スペイン語で専門的な議論の輪に加わって、その分野の論文を読んでいると使われる単語がわか

るので、スムーズに参加できると感じました。他の地域への留学や WS でも同様かと思います。

また、留学の検討を始める頃には、同時に奨学金もチェックしておくことをお勧めします。日本人が日本の大学に通っていると奨学金はほとんどありませんが、海外に行くと容易に奨学金を得ることができます。私が利用した例ですと、学部生の時にメキシコに留学した時は、日墨戦略的グローバルパートナーシップ研修計画（通称「日墨」）を利用しました。これは日本とメキシコの政府間の交換留学で、毎年 8 月から 1 年間、月々の奨学金と往復の航空券付きでメキシコに留学することができます。今回の大学間の交換留学では、東京大学の提供している奨学金を利用しましたが、これは他団体に比べれば額は小さいものの、手続きが簡単で、東京大学の交換留学であれば容易に審査に通ることができます。GLAFS からも奨学金を支給してくれるので、担当の方に早めに相談すると良いと思います。私は修士 1 年なので奨学金の類はまだ支給されないものと思っていましたが、GLAFS の先生と喋っていた時に出せるかもしれないということと言われ、実際に出していただくことになりました。ただし、申請が遅かったためか帰国後後払いということになりました。いずれにせよ、早めに相談してみると

良いと思います。

留學生活のアドバイスとしては、勉強・研究以外に現地で何らかのプロジェクトを持つことをお勧めします。留學すると、日本で滞在している時と比べて学業以外の活動が減ってしまい、あってもカギカッコつきの国際交流のような中身の薄い活動になりがちかと思えます。実際、私も学部生の時の留學では学業以外の活動に日本にいる時ほど深みがなく、周りの留學生（同じ制度で毎年30人ほどが渡航します）も同様に感じていました。その点、今回の留學では自分の興味からプロジェクトを立ち上げ、それにも熱心に取り組めたことで振り返っても非常に充実した半年間で、学業にも集中して取り組めていたと思えます。